
永遠の夢を見つめて

瑠璃色の墮天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠の夢を見つめて

【Nコード】

N4380J

【作者名】

瑠璃色の墮天使

【あらすじ】

これで栞編は打ち止めです。

「・・・であり、明日は避難訓練を実施する。時間は・・・」

ええい、まだ終わらんのか！？

欠伸を何度も噛み殺しながら、俺は黒板の上にかかっている時計を見る。

時刻は四時十分前。

長い授業も終わり後はHRのみなのだが、今日は何故か延々と連絡事項があった。

お陰でなかなか終わらず、俺は眠くて仕方がない。

「前回の避難訓練では注意が散漫で、態度の悪い者も多かった。くれぐれも次は・・・」

分かった、先生。真面目にやるから俺を帰してくれ！

窓から外を見ると、群青色に染まった空の下で見慣れた中庭の景色が見えた。

夕暮れにはまだ早いこの時間帯特有の気候のおかげで、心身ともに緩んできている。

ここで机に突っ伏して睡眠活動をすれば、さぞ気持ちがいいことだろう。

「・・・である。それと次の期末考査のついてだが・・・」

ま、まだ続くのか！？俺に死ねと言うのか！？

生きるか死ぬかの過酷な戦いを、平凡な学校の教師内で激しく繰り広げる俺。

ちなみに我が従姉妹はあっさりと敗北し、現在既に器用な体勢で寝ている。

目を瞑っている以外、起きている状態と全然違和感がない姿勢で眠っている所がすごい。

いずれ、名雪に教えを乞いたいものだ。

「・・・である。おっと、少々長くなってしまったな。

今日のHRの連絡事項は以上だ」

少々どころか、思いつきり長かったぞ。

恐らくクラスメートの誰もが心の中でつつこんだであろう台詞を、俺も心の中で呟く。

まあ、とにかく終わったから良しとしよう。

俺はとっとと帰るべく、机の上に置いていた鞆を持って立ち上がるうとすると、

「あ、それともう一つ……」

まだ何かあるのか!?

ようやく帰れるという安堵感を逸らされて、胸の奥で焦燥が湧き起こる。

急かしたい気持ちを無理やり抑えこませて、俺は壇上に立つ担任を見る。

「美坂が今日欠席をしている事は皆も分かっていると思うが……
……」

そういえば、珍しく今日は香里が休んでいるんだよね……

俺は今日一日ずっと空いていた机と椅子を見る。

日頃真面目に授業を受け、勉学に励んでいる香里が休むのは今まであまりなかった。

何か事情でもあるのかと心配して俺が名雪に聞いてみると、今日の欠席は単なる風邪だそうだ。

日頃は何かと強気な香里ではあるが、やはり女の子だったようだ。

「今日配布した連絡プリントと期末考査の時間割を誰か持っていてあげてほしい」

今日配られたプリントは明日提出の急ぎのプリントだ。

確かに直接渡しにしなければ、明日あいつが困るだろう。

仕方がない、持って行ってやるか……

俺が立候補しようとする、俺の前の席のある男が手を上げた。

「先生、俺が持っていきます！」

「お、北川か。すまんが頼んでもいいか？」

北川が？

後姿からでも分かる強い意気込みを感じて、俺は溜息を吐いた。

香里が風邪で休んでいるのだ。気になって様子を見に行きたい気持ちにはわかる。

だがこの男の場合、下心がないと断言できない所が不安なのだ。

「どうせ俺の家から近いですし、帰りに寄るのに不都合はありません」

きっぱりと言う北川は、どこか清々しささえ感じられた。

先生も納得したのか、壇上よりプリントを持って北川に渡した。

「これがそのプリントだ。すまないがよろしく頼むぞ、北川に相沢」

「・・・ちょっと待ってください」

何か不思議な単語が耳に入った気がして、俺は先生を呼び止める。

「今、なんて言いました？」

「うん？だからよろしく頼むと言ったぞ」

「いや、その後です」

「だから、北川に相沢と」

「何でそこで俺の名前が出るんですか!？」

確かに見舞いには行こうかなと考えていたのは事実である。

だが、北川が立候補した時点で俺の出番はないはずだった。

「何を言っているんだ。北川といえば、必然的に相沢も一緒だろう」

「抱き合わせの玩具みたいな扱いは止めてくださいよ！」

「はっはっは、面白い冗談を言うな」

いや面白いのはあなたですよ、先生……

教室内が何を言っても無駄だという雰囲気になっており、俺は飲まれそうになった。

「よし、決まりだな。俺と相沢で行きます」

「うむ、よろしく頼むぞ」

「いやよろしくって、あんたら……」

お、俺って一体……

どうやら何時の間にか選択肢はなかったようだ。

朗らかに笑いあう北川と先生を見て、俺は取り残されたような虚無感を覚えた。

俺がそんな危機にあっている中で、我が頼もしき従姉妹は夢の中で安らいでいるようだ……

気持ち良さそうに目を瞑る名雪を見て、俺は机に突っ伏した。

「あれ、祐一さんに北川さんじゃないですか!？」

玄関先で俺達を見るなり、栞は目を真ん丸にして驚いていた。

そういえば、栞の家に来たのは初めてだったな……

「おいっす、栞。香里の容態はどうだ？」

「え、え……あ！？お姉ちゃんのお見舞いに来て下さったんですね。」

「すいません、ちょっとびっくりしちゃって」

照れくさそうに頬を赤らめる栞に、俺は苦笑する。

学校から帰って着替えたのか、栞はもう私服姿だった。

春物のデザインで統一した栞の姿は、こうして見ると別人のように新鮮な感じがした。

「ああ、プリントとテストの時間割を持って来たんだ」

「どうもわざわざありがとうございます。」

お姉ちゃんはお昼に診療所に行ってから、だいぶ具合も良くなっています」

栞がそう言うと、後ろで聞いていた北川は安心したように一息ついた。

どうやらあまり心配もなさそうだったので、俺も内心嬉しかった。

「何ともなさそうで良かったよ。このプリントを美坂に渡しておいてくれるかな、栞ちゃん」

「あ、せっかくだすし上がって行ってくださいよ。お姉ちゃんも今はもう起きていますから」

にこにこ笑顔で栞が家に招いてくれた。

だが逆に栞の言葉にびっくりしたのか、家の奥のほうから声が聞こえてくる。

「ちょ、ちょっと栞！？北川君達を家に入れるの！？」

「だ、だってせっかくお見舞いに来てくれたのに追い返すのは失礼だよ、お姉ちゃん」

栞のもつともな正論に返す言葉がないのか、黙り込む香里。

そこへ北川が追い討ちをかけるように、完全に面白がった口調で言葉述べる。

「帰ってやることもないし、せっかくだからお邪魔しようかな。美坂の様子も気になるからな」

そう言って、さっそく家の中に入り玄関より上がろうとする北川。

声と玄関の音を敏感に察したらしい香里は、慌てたような声をあげる。

「ちょ、ちょっと待ちなさい！？き、着替えないと・・・」

なにやらどたばたと、家の奥から激しい物音が聞こえてくる。

後に残された俺と栞は顔を見合わせて、互いに笑いあった。

「香里でもあんなに慌てることはあるんだな」

普段は冷静にしている香里が、あれほど取り乱した声を出すのはめったにない。

こうして聞いてみるととても新鮮で、そして微笑ましかった。

「北川さんが家に来ましたから。お姉ちゃんだってびっくりしますよ」

くすくすと面白そうに、手を口にあてて栞は笑う。

余程日頃の姉とは違う様子が面白かったのか始終笑顔だ。

「北川も香里が休みで、今日はずっと心配していたからな。おかげで、俺までこうして付き合わされてしまった」

「祐一さんは巻き込まれた形だったのですか？」

上目に俺を見つめる栞に、俺は少し考えてから口を開いた。

「うーん、どうだろうな。香里を心配したのは本当だったしな。敢えて言うなら、状況に自ら流される形で来たって言うところかな」

人間、きっかけがないとなかなか行動はできないものだ。

特に俺のような頑固な人間だと、肝心な所で迷ってしまったりする。

だからこそ……素直に気持ちを出せるこの娘に惹かれたのかもしれない……

「ど、どうしたんです？ そんなにじっと見つめて」

どうやら思わずじっと見つめてしまったのか、栞は恥ずかしそうにもじもじしている。

はっと俺も気がついて、視線を思わず逸らして返答する。

「い、ごめん……いろいろと考えてしまってた」

「ふふ、変な祐一さん」

複雑な気持ちだったが、それでも悪い気はしなかった。

俺は照れくさい雰囲気から脱却しようと、考えていた事を口にする。

「……こうして栞の家にくるのは初めてだったな」

「え？あ、そうですね。祐一さんの家には何度もお邪魔しているのに……」

あの誕生日以後、栞はよく家へ遊びにくるようになっていた。

秋子さんもしっかり栞が気に入っているのか、いつも手料理などをご馳走している。

栞も栞で秋子さんにレシピを伝授されたりと、互いにいい関係になっていた。

って、待てよ……？

「ひょっとして……今、栞の両親もいるのか？」

「はい、お母さんがいますよ。そうだ！ちようどよかったです。祐一さんの事、お母さんに紹介しますよ！」

ちよ、ちよっと待て！？

なぜお見舞いからそういう展開になるんだ！？

「い、いや、それはまた今度で……」

「駄目ですよ。せつかく北川さんも来ているんですし、二人を紹介します」

姉妹揃って男を紹介したら、お母さんぶっ倒れたりしないだろうか？

変な心配をしてしまいそうになる俺であった。

「さあ、祐一さん。どうぞ、どうぞ！」

あまり自慢できる家じゃないですけど、今日はゆっくりとしていただきますいね♪」

笑顔のわりに妙に力強く俺を引っ張る栞。

し、栞、いつからそんなに力持ちさんになったんだ！？

俺はなす術もないままに、家の中へ引っ張り込まれた・・・

「ちょ、ちょっと北川君！？あんまりきろきよろと見ないでよ」

「へえ、ここが美坂の家か・・・」

思いは違えど、惹かれあう二人。

「お母さん、この人が祐一さんです」

「あ、ど、どうも、この度は・・・・・・・・・・」

思いを通じて、今を生きる二人。

それぞれの、それなりの生き方があり、願いがある。

そして、俺達はこうして今を生きている。

誰にも代えられない、自分だけの人生を・
・
・
・
・
・
・
・

<終>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4380j/>

永遠の夢を見つめて

2010年10月8日23時52分発行